

中村哲郎教授をしのんで

略 歴

中 村 哲 郎 昭和7年4月2日生 新潟県

学歴 昭32. 3 東北大学工学部電気工学科卒

43. 3 工学博士の学位授与（東北大学）

職歴 32. 4 日本電気株式会社入社

32. 7 〃 電子管工業部半導体開発部技術課
製作係

41. 11 〃 半導体事業部超高周波素子部技術
課設計主任

45. 1 〃 ダイオード部技術課長

51. 6 〃 生産技術部技術課長

53. 1 〃 生産技術部長付

53. 3 同社退職

53. 4 豊橋技術科学大学工学部教授

平 3. 8 〃 技術開発センター長（～5.7.31）

6. 4 日本学術振興会真空マイクロエレクトロニクス第158
委員会構成員

6. 10. 30 死亡

受賞 昭53. 11 （財）電気科学技術奨励会第24回オーム技術賞受賞



中村哲郎教授の急逝を悲しむ

「土曜日だというのに哲さんも人使いがあらいんだから」とボヤきながら家を出る。酷暑の続く盛夏、集積回路プレーナー技術講習会の修了式の日である。中村グループが総力をあげて行ってきたこの講習会は15年前にはじまり昨今は京浜地区からの参加者も多い。まさにリフレッシュ教育のはしりなのである。「修了証は学長から渡した方が箔はくがつくから」などとオダてられ毎年8月第一週に行われるこの会の修了式に出てきた。今年がそれが8月6日の土曜日だったのだ。終って記念写真。少しはいい気持ちにさせてもらって辞去する。

「韓国半導体デバイスの研究グループと交流してきたがもっと本格的にやるために先方の大学と共同研究協約を結びたい」という。調査するに相手大学とは慶北大学校、ソウル大学につく総合大学、これなら相手にとって不足はないし、共同研究が半導体以外の分野にも発展するならそれも面白からうと哲さんに連れられて大邱へ赴き先方の学長とサインの交換をしてきた。後日金益東学長も来学された。

学 長 佐々木 慎 一

口を開けば半導体、ものを語ればマイクロマシニング。君の熱意・執念が実り固体機能デバイス施設が平成5年度補正予算のおかげで現実のものとなったのは去る6月のことである。ここで君はこれまで抱いてきた夢を大きく抜けてゆくはづであった。それが9月末に脳梗塞こうそく。見舞った限りでは軽症にて言語や動作に多少のもどかしさは残るものの研究への復帰は時間の問題と思っていた。病室を訪れるたびに手を握ったきり放さず仕事のおくれを気にする君に「当分はニコニコ坐まっていて若い人たちの働くところを見ていればいいんだよ」などと慰め、事実そうなるはづであったのに10月30日に急逝してしまう。あわただしいなか、通夜・告別式となり祭壇に飾られた君のこやかな写真をみたら泣けて困った。

哲さんはこの上なく純真そして温和な性格。筆者に甘えてくれるところもあり、筆者も哲さんは殊のほか好きだった。昼の学校食堂、少し猫背の君が盆にラーメンをのせて現われる、そんな白日夢をみてしまうのだ。